

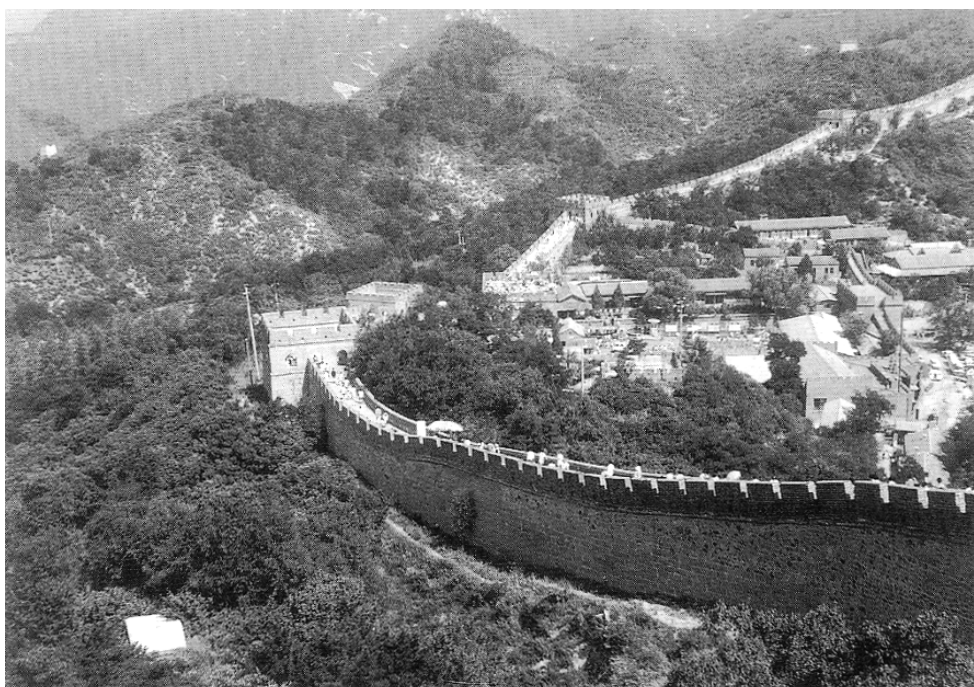
平和の炎

Vol. 4

第4回読谷村平和創造展

—— 平和郷はみんなの手で ——

読谷村初の中国現地調査
— 旧日本軍による中国侵略の実相 —



中国悠久の歴史を伝える「万里の長城」。
数千年の歴史のなかに、昭和初期の日本の侵略の歴史も刻まれている。

読 谷 村

発刊にあたって

「平和に勝る福祉はなし」

読谷村長 山 内 徳 信



これまで、村民の絶大なるご協力のもとに平和村づくりを進めてまいりましたが、戦争とは何か、そして平和とは何かをあらためて問い直し、日常生活の中で平和問題を考える機会としたというのが、本展の主旨であります。

それは、去る沖縄戦で多大な犠牲の上に学びとった教訓、すなわち軍隊は住民の安全を守り、平和と自由を保障してくれるどころか、結果的には全てのものを破壊する以外のなものでもなく、国民一人ひとりにあらゆる意味での強制を強いるものであったという教訓を生かし、二度とあのような戦禍に巻き込まれることがないような地域社会をみんなの手で築き上げる過程でありました。したがって、今後とも住民の生命財産を守り、豊かで平和な地域社会建設のために具体的な平和創造運動を展開していくことは極めて重要なことであります。

さて、本村では1982年6月の「非核宣言」に続き、今年3月29日、沖縄県内では初めての平和条例を制定し、同4月1日から施行してまいりました。その平和事業の一環として初めて日本の中国侵略の実相を調査すべく、担当職員を派遣致しました。本書は、その中国現地調査の内容をまとめたものであります。その内容は、戦争の惨禍を被った人々にとって、その肉体的、精神的苦痛が如何に大きいものであったのかをよく示しています。同時に、平和の大切さを痛感し、正しい歴史認識を持つことが最も重要なことであることをもまた教えてくれております。

これまで沖縄戦の実相を探求し、展示してまいりましたが、今年から中国における日本軍の侵略の様子を展示することができます。これは、国際的な視野で戦争と平和について考えなければならない今日、時機を得たものであり、かつ今後の平和創造運動の新たな展開をも期待するものであります。

最後に、日本軍の侵略・虐殺によって亡くなった多くの人々へ哀悼の意を表し、真実を語りあかし、受け継いでいくことの重要性を改めて強調し発刊のことばと致します。

1991年12月7日

目 次

はじめに	50年目のパールハーバー	1
第一部	旧日本軍による中国侵略の実相	3
第1章	現代中国の概観	5
1.	「中日友好」	5
2.	「四つの近代化」	5
3.	「両隣不如対面」	6
4.	「国営企業」	6
5.	中国のかかえる内部問題	7
第2章	旧日本軍による中国侵略の実相	8
1.	平頂山虐殺事件	8
2.	上海事変と日本軍の上陸	17
3.	南京大虐殺事件	21
第二部	侵略にまつわる諸問題	29
1.	教科書をめぐる問題	31
2.	石原発言への中国側からの反論	36
3.	日本国憲法とPKO問題	48
4.	日本の賠償責任について	52
第三部	現地調査写真スナップ	55
あとがきにかえて		71

はじめに

50年目のパールハーバー(真珠湾)

1991年12月8日、あのパールハーバー奇襲攻撃から満50年を迎える。

読谷村ではこの日を平和創造展の初日としてきた。それは、日本の侵略戦争についてその加害者としての側面を重視した歴史の検証を行い、平和創造に資することを目的とする展示会の主旨を明確に打ち出すことでもあった。

ところで、北大助教授の山口二郎氏は「アメリカとの関係だけを見る上では12月8日を日本の出発点とすることにも意味があるが、日本がアジアの中で生きていくためにはこの日を分水嶺にすることによって視野から抜け落ちる問題を放置するわけにはいかないのである。(朝日ジャーナル1991.10.11)」と述べており、全く同感である。

開戦当時国の日本は、「戦争や侵略を始め国の責任」がいかに重いものであるか、半世紀を経過する今なお、果てしなく戦争の犠牲者が存在している事実を隠ぺいせずに、世界の人々に知らせることによってしか、日本が信頼を回復し、戦争の抑止と世界平和の創造に積極的に関与する道はないであろうと思う。この考え方にに基づき、この日を分水嶺とすることなく、中国、東南アジアへの日本の侵略戦争の研究も続け、村民ひいては県民の平和創造への取り組みの一助としたいと思う。

さて、今日「パールハーバー」をどの様に記録し、教えて行くかを論じること無

意味なことではないだろう。

アメリカ社会の中で「パールハーバー」は日本人の本性として理解されているようである。マサチューセッツ工科大学のジョン・ダワー教授は、「アメリカ社会の奥深くで、1941.12.7の奇襲作戦は日本人の本性を示すものとして、つまり“だまし討ち”こそ彼らの特技であるとして、くすぶり続けている。」(*注 日本時間の12月8日はアメリカでは12月7日)という。そして、「日本人に対する不信、懐疑心は『パールハーバー』の生み出した最も顕著な遺産の一つである。」と結論づけている。今日の貿易摩擦や日本たたきの現状とも重なって、アメリカ人の心の奥底にそのような心情が潜んでいることは間違いないのではなかろうか。

一方、日本にとっての敗戦直後の教訓はというと、それはやはり戦争への反省とともに軍部指導者の発言を信用してはならない。平和な世界こそが最も尊いものであり、今後二度と軍国主義化しないといったことではなかろうか。しかし、湾岸戦争を巡る欧米各国の反応は日本の煮えきらない態度に黒声、嘲笑をあびせんばかりであった。せっかくの教訓を切り崩す役目を果たそうとしている。経済大国となった日本は、軍事的にも率先してそれを行使しなければならないのだとする考え方が熟っぽく吹き込まれている現状からもそのことがうかがえ

る。

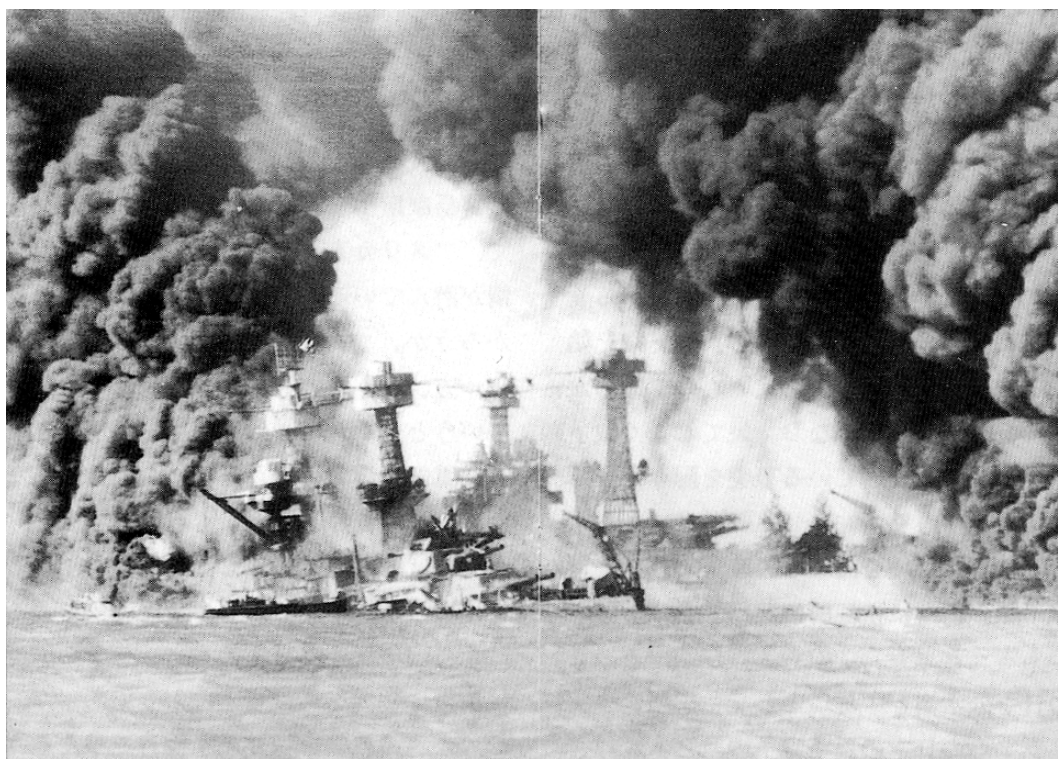
国家というのは、いずれの国の場合でも、過ぎ去った年月、過去の事件や出来事を自らの都合のよいように解釈し、当面の課題、目的の実現に向けてそれを巧みに利用していく。

その一方で、はるかに長期的で、残虐行為を繰り返してきた「日中戦争」については、歪曲されたり無視されたりとその実態の多くは今もって闇の向こうに葬られたままである。

いずれの国も等しく、自らの歴史を規定し、書き記す権利を持っている。国家の歴

史の記録というのは、国民の記録であると同時に、国自らが選択し、評価し、描き出した、国自身の姿でもある。それゆえ国が忘れたいと望み、その方向で処理された事柄は、時にそのまま忘れ去られていく。

20世紀もいよいよ大詰めにいたった今、各国が自分自身の甘い記憶や夢の記憶に浸っている余裕はない。アウシュビッツ、南京大虐殺、ヒロシマ、ナガサキ、その他すべての悲劇、惨禍は被害国だけのものでもない。「パールハーバー」として例外ではなく、すべての者が等しく自らのものとすべき過去であり、歴史的汚点である。



1941年12月7日（現地時間）パールハーバー奇襲作戦
火炎と黒煙につつまれるウエスト・バージニア号（沈没）とテネシー号

第一部

旧日本軍による中国侵略の実相

「戦争を起こすのも人間である。しかし同時に戦争を拒否し、平和な社会を築き得るのもまた人間である。」は、これまで3回開催してきた平和創造展のアーチ門に掲げた言葉である。ここで言う「人間」とは、中国、東南アジアをはじめ世界の人々をも含んだ総体としての「人間」なのである。国際化時代の今日、平和問題は常に世界的な視野に立って考えることが極めて重要となってきた。

県内で初めて「平和条例」を制定した読谷村（今年4月1日施行）その平和事業の一環として初めて日本の中国侵略の実相を調査すべく現地に赴いた。

そこには耳を疑い、目を覆いたくなるような惨状が今日の情景としてあった。

第1章 現代中国の概観

現地調査の本論にはいる前に、いくつかの項目で現代中国の様子を概観してみよう。

1. 「中日友好」

今回の調査員の一人であった長谷川太郎氏はこれまで何度か中国や台湾を訪れ中国の国内事情に詳しい人である。上海から南京までの列車の中で彼から多くの示唆を得ることができたので彼の発言をもとに話を進めることにする。

中国を訪れ、まず驚くのは私たちのような調査団体に対する中国側旅行社の添乗員や各地での関係者の歓迎ぶりである。外国人が訪れるとかならずといっていいほど盛んに歓迎されるのであるが日本からの旅行者は特別のようだ。この歓迎には中国の「友好」政策とでもいうべき考え方が反映されている。換言すれば「日中友好」と「中日友好」の違いがそこにはあるのである。

中国側の「中日友好」は、二度と過去の過ち（戦争）を起こさないために「友好」はぜひとも必要なことであると考えている。それは中国が現在進めている経済発展政策の実現のためにも、まず政治的安定、とりわけ近隣諸国との「友好」はその第一条件であり、「戦争を起こさないこと」が最大の国策といえる。現に、教育の中でも日中戦争の歴史的事実を積極的に教え、戦争になると農業、工業をはじめすべての産業において大きな打撃となり、経済の発展が困難になってしまう。戦争のない平和な社会が今の中国には必要であり、「友好」関係樹立のために日本との戦争による悲劇、惨禍を

教えるのだという。（上海市教育工会主席魯光栄氏の発言から）

日本側の「日中友好」はどうなのであるうか。「友好」はあれば望ましいがなければなくてもよいというのが日本政府の考えではないだろうかと長谷川氏は指摘した。福沢諭吉の「脱亜入欧」の思想がまだ生きているのではないかという主張である。

2. 「四つの近代化」

平和な政治社会情勢の上に立って中国が進めようとしているのがこの「四つの近代化」政策である。「四つの近代化」は、1975年の1月に開催された第4回全国人民代表議員代表大会で当時の周恩来首相が提起した「今世紀中に農業、工業、国防、科学技術の現代化を全面的に実現し、わが国の国民経済を世界の前列に立たせる」（中国では「近代化」とはいわず「現代化」と称している。）という構想を基に具体的な目標を立てた重要施策のことである。

しかし、現実にはかなりの難問があり、今世紀中に所得を倍増するとした計画目標はすでに、その実現が不可能であることが決定的となり前途に暗雲がたちこめている。天安門事件以来、米国を初め多くの国々の制裁措置によりますます困難な状況を創り出してしまった感は否めない。

こうした難しい局面であればあるほど、協力してくれる国の存在が必要となってきた。その一番手が日本にほかならない。

これまで中国の外交戦略対象はソ連、台湾、日本、米国であった。しかし、路線の違いや覇権主義への対応をめぐり対立していたソ連は、経済の悪化が深刻となり対象

から外された。米国は先述の天安門事件以来中国への経済援助に前向きでないし、台湾は徐々に開発援助を進めているが、技術、財政力では日本には遠くおよばない。やはり日本の援助かどうしても必要である。中国は日本に対し、「四つの近代化」実現に向けて資金、技術協力、貿易などの点で質量ともに最も期待を寄せるようになってきたのである。日本人に対する歓迎ムードもこのような情勢が背景にあるとすれば理解できるものである。

3. 「両隣不如対面」

中国の古い諺に「両隣不如対面」（両隣は対面におよばず）というのがある。日本でこれに似た諺といえば「向三軒両隣」ということになるが、日本のこの諺では5軒とも平等に扱われており優劣は存在しない。しかし、中国では呼んで字のごとく両隣よりも向い側が大切だというのである。中国のいう両隣はベトナムと朝鮮であり、向いは日本にほかならない。その理由は、玄関を開けたら家の内が丸見えになり、無防備になるというわけである。

「両隣不如対面」の考え方からすれば、「対面」である国には「友好」こそが最も重要な政策となる。そして、「友好」のためには「怒」の思想もまた大切なことになる。「怒」とはゆるすことである。中国は、後述するように甚大な被害と惨禍を被った日本の侵略戦争に対し終戦後「怒」の思想で日本をゆるした。戦時賠償も取らず、領土を分割統治するということもしなかった。（この件には、米国側の意向も大きく反映されており後述することになる。）日清戦争が終

って日本が中国側から賠償金を取り、中国東北部の地域を分割統治にしたことに比してなんと寛大な措置であっただろうか。

4. 「国営企業」

経済改革の難しさはやはり中国経済自身の中にある。その代表が「国営企業」であろう。「政府の財政赤字の一部は国営企業の製品に形を変えて倉庫に眠っている。」（木崎 翠 1991年7月号「世界」）という指摘がある。原材料価格や賃金コストの上昇があるにもかかわらず「国営」であるだけにその上昇分を簡単に製品価格に転嫁できないのと設備投資や現場管理などについての経営手段の未熟さも重なっている。「国営企業」をいかに改革できるか、中国経済のネックとなろう。

長谷川氏はこの件について一つの事例を示してくれた。日本で技術研修を受けた中国人技術者が工場に戻り、生産ラインを改善して生産力を上げようと提言した。しかし、工場長はその提案が確実に生産量増大につながるものであるにもかかわらず、受け入れてもらえなかったという。その理由は、それまでのその工場のノルマが100だとすれば、生産力が上がった分、来年はノルマが120になるだろう。そして、工場長の椅子をその技術者に奪われてしまうのではないかと危惧し、工場長の保身的な立場から拒否されたというものであった。

中央政府の改革への熱意は末端工場レベルでは生かされていない現状がここにみえる。さらに、能力が100ある人は100働き、能力が120ある人は120働くが給料は一緒。それなら楽な100のほうがいい。こうした考

え方が現場にはあり、向上心がそがれてしまっている。少ない量の財を公平に分配する、中国型の平等経済は悪循環を生み出しているように見える。

5．中国のかかえる内部問題

人口約12億、56の民族でなり、多くの言語がそれぞれの民族の文化を象徴し、東西の時差が4時間という広大な国土を持ちながら同じ通貨と同じ時間で動く国、中国。日本の国会にあたる人民代議員大会議場には13もの同時通訳ボタンがそれぞれのテーブルに設けられている。私たちには想像絶する困難があろう。とりわけ、行政、教育文化の違いは統一国家としての中国を危うくしているのかもしれない。



天安門広場に面する人民代議員大会議場。

さらには中国の人口の約8割は農民である事実も忘れてはならない。農民は、過去との対比でしか物事の善し悪しを判断しないという。例えば、10年前は白米は食べることができなかったが、今は食事の度に白米が十分ではないかもしれないが食べることができるようになった。あのころに比べたら幸せではないかということになってしまふというのだ。中国の改革は農民の意識

改革も重要であろう。長谷川市は農民が変わらなければ中国は変わらないと結論づけた。

また、民衆のモラルの問題や政治的無関心も表面化してきているという。中共中央党学校前副校長 韓樹英氏は「中国社会は今やモラルが極点にまで低下している。社会主義道徳が崩壊同然であるだけでなく、儒教的な家族結合を中心とした封建道徳も、さらに契約思想を中心とした資本主義道徳もすべて崩壊状態にある」(1991年7月号「世界」加々美光行論文引用)と述べている。加えて、国力に関する自己認識も変化し始めている。A S E A N、N I E Sの国々の急速な経済の発展が発端となり、かつてのような優越思想に基づいたグローバルな「中心」として積極的な世界戦略を展開することを政府は放棄した。このことが、民衆の中でどの様に消化されていくのだろうか。これも一つの課題かもしれない。

第2章 旧日本軍による中国侵略の実相

日中戦争は、いくつかの代表的な戦闘や事変と呼ばれる戦争が重なってその全容を成している。本書で関係してくるものを中心に年表にして記す。

1928年（昭和3年）	張作霖爆殺事件
1931年（昭和6年）9月18日	柳条湖で鉄道爆破、奉天（瀋陽）占領 満州事変勃発
1932年（昭和7年）1月28日	第一次上海事変勃発
同 年 9月16日	平頂山事件発生
1937年（昭和12年）7月7日	盧溝橋事件勃発（日中全面戦争へ）
同 年 8月13日	第二次上海事変勃発
同 年 8月23日	上海市宝山区川沙より日本軍上陸
同 年 12月13日	日本軍南京占領（以後数カ月間に及ぶ南京大虐殺へ）

唯一地上戦が行われた沖縄、世界で初めて原爆を投下された広島、長崎。悲惨な体験を持つ人々にとって戦争は過去のものでなく、今日でもまだ心の痛みをともなっている。思い出されている。しかし、私たちはこうした「被害者としての戦争」だけを認識すればいいのであろうか。

日本軍の台湾侵攻（昭和5年・霧社事件）に続く中国侵略に始まり沖縄戦に続く広島、長崎で終結した15年戦争は、日本軍の朝鮮半島、中国、東南アジア諸国への侵略という史実のなかにこそその実相がよく現れているのではないだろうか。そこに登場する日本人は被害者ではなく加害者である。中国への侵略をとおして加害者の立場を認識し、被害を被った人々の心の痛手を知ることはきわめて重要なことである。

たった一度の中国訪問ですべてを知ることなどできる由もない。しかし、これから

紹介していくいくつかの虐殺事件の真相や日本軍による虐殺の現場から幸いにして生き残ることができた数少ない生存者の証言のなかに日本軍の中国侵略の全体像の一部が見えてくる。

虐殺の被害者が忘れようとすることは自由だ。しかし虐殺した側の国民が忘れることは、犯罪の上ぬりにほかならぬ。（本多勝一）

1. 平頂山虐殺事件

私は本多勝一氏の著書『中国への旅』という本を読むまで平頂山虐殺事件のことはほとんど知らなかった。今回の中国現地調査が実現する運びとなり、改めて読みなおしこの事件のことはある程度頭の中に入れていたつもりであった。しかし今年の8月17日、平頂山殉難同胞遺骨館に足を踏み入

れた途端に身体中の血の気がひいていくのを感じ、恐怖とともに鳥肌が立つほどの衝撃を受けた。そこには、日本軍が虐殺した死体が焼き払われた当時のままの姿で無数に横たわっていたのである。

いったい平頂山虐殺事件とはどういう事件であったのだろうか。前述の「中国への旅」から引用し紹介しよう。

1931年9月8日夜、日本軍は瀋陽（旧奉天）の柳条湖で満州鉄道を爆破し、それを中国軍のしわざとして攻撃を開始し、東北地方全土の占領に乗り出した。（満州事変）

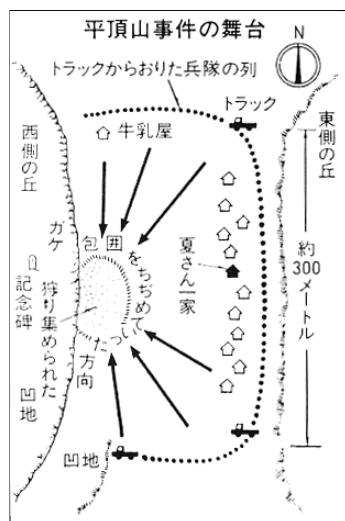


現在でもあの日のように、北京と哈尔滨（ハルビン）を結ぶ鉄道（京哈鉄路）が走る柳条湖。この碑の横では大きな記念碑が新しく建造中であった。

石炭、鉄鋼などで有名な撫順はその瀋陽から北東に40キロメートルほど離れたところにある。当時この地方で活躍していた抗日義勇軍ゲリラが平頂山と隣村の千金堡あたりから撫順の日本占領軍拠点に攻撃を加えた。ゲリラは攻撃ののち直ちに撤退した。だが日本軍はゲリラの集結した平頂山一帯の住民を「匪族と通じている」と断定した。当時の平頂山には約400世帯3,000人余りが、800棟ほどの小さな家々に住んでいた。撫順炭鉱を警備する日本軍憲兵と警備兵たちは、その全ての住人を一人残さず殺すこと

に決めた。そして、1932年9月16日、約3,000人の住民虐殺計画を実行した。これが平頂山虐殺事件である。

第一陣で現れた3台のトラックは図のような配置で止まり、満載されていた兵隊たちは、西側の丘を除く三方に展開して集落を包囲した。西側の丘は集落側が崖になっていて、住民を追いたてながらその崖ぎわに集めるかたちで包囲の輪が縮められていった。集められた住民はと最初何事が起こ



るか全く知らなかったが、徐々に自分たちの運命に気づき始めた。しかし気づいたときにはすでに遅かった。機関銃の集中射撃は容赦なく続けられほとんどの住民は死に追いやられた。日本軍はその後石油を掛け死体を焼き払い、さらにダイナマイトで崖を崩して死体を埋めた。

戦後、住民の証言に基づき平頂山の一帯を掘り出したところ冒頭に述べた死体が発掘された。その場を保存するため、周辺からブロックを積み上げ館をつくった。それが「平頂山殉難同胞遺骨館」である。

今回の調査では、その虐殺の現場から奇跡的に生き残ることのできた2人の生存者の証言を聴くことができたので、これから紹介します。(通訳者の話す日本語を少し読み易くしましたが割愛はしておりません。)

莫德勝(バク・トクショウ)当時8歳



証言する莫德勝氏。

皆さま方のご来訪に歓迎の意を表します。皆さま方がこの平頂山の虐殺事件の調査に來られて私は大変喜んでいます。

私たちは虐殺事件を歴史のテキスト(教科書)として、人民大衆と共に侵略戦争に反対し、平和を守っていくために努力しようではありませんか。

私は、ここで起こった平頂山事件の生存者の一人です。日本の軍国主義者(日本軍)がどのようにここ平頂山で住民を虐殺したかについてお話し致します。つまり、そのことは日本軍による平頂山住民を殺害したという犯罪行為について話すことにもなります。

1931年9月18日、日本軍はこの東北地方(旧満州)で侵略戦争を始めました。(満州事変勃発・中国では「九・一八事変」とい

う。)翌9月19日からこの撫順市も日本軍に侵略されました。



母が子を抱きかかえながら惨殺された姿をとどめる遺骨。

日本軍は、東北地方の多くの人民大衆に残酷な搾取と迫害を行い、また平頂山でも村民達を虐殺しました。3,000名以上の村民が日本軍の殺人行為により殺されてしまいました。私はこのことを生涯忘れることはできません。

虐殺事件が発生した時、私は8歳でした。妹はもっと若かったのですが…。その虐殺の前日は、中国での伝統的な祭りの一つ八月の十五夜でした。旧暦の8月15日「十五夜」祭りだったのです。その時は、誰もがこの祭りが最後の祭りとなろうとは考えていなかったのです。

その「十五夜」の夜、私はおじいさんの家にいました。早くに寝てしまいその夜のことは知りませんでした。

翌日の朝、私たち子供3人が西の方の低い丘に登って村の様子を見ていました。すると日本軍が村の方に入ってきました。私たちは自分の家に走って帰りました。「大変だ大変だ!。日本軍が村を包囲したよ。」と叫んだのですが、それに対しお母さんは大丈夫ですよと言い、お父さん、おじいさん

もすぐに帰りますよと言ったのです。間もなくお父さんが帰ってきたので何事が起こったの、なぜ日本軍が村を包囲したの、私たちが入ることはできたのに村を出ることが許されません、どうしてですかと尋ねました。

隣には劉さんというおじいさんが住んでいましたが、そのおじいさんも大変だ大変だ日本軍は村の北側から一軒一軒搜索しているよと言いました。日本の兵隊達は、平頂山の住民達が抗日ゲリラに通じていると考えている、などと言い、話し終わったら帰りました。お母さんはどこへ隠れようか、お父さんはどこに…。今日村を出るのは難しいから隠れるということだったのですが、おじいさんは「私たちはどうして隠れなければならないんだ、私たちは泥棒でもゲリラでもない、日本軍にもその辺の理屈は分かってもらえるだろう。」と言いました。

間もなく隣の家から日本兵の叫ぶ声が聞こえてきました。続いて私たちの家のドアも叩かれました。ドアを開けたら3人の日本兵がいました。そのうちの一人、年輩の人が「この辺りにゲリラが来ました。私たち日本の兵隊は皆さんを保護するために来ました。」と言うのです。でも、お父さんは「ここは私の家です。私はどこへも行きません。」と言ったのですが、もう二人の日本兵が早く出ていけと銃で威嚇したので、お父さん、お母さん、おじいさんらも一緒に出て行きました。外にはすでにたくさんの人々がいました。私たちもその中に加わりました。

日本の兵隊は村民を押し付けて、もし遅く歩く人がいると銃剣か小銃でつついて歩

かせました。そのようにして、3,000名余りの村民が虐殺現場に集合させられました。

60年近くたって、この辺りの地形も変わっているのですが…。村の北側に牛乳屋があり東のほうが丘でそこに日本の兵隊が並んでいました。一人の軍曹が何かを話した後、30名余りの朝鮮人が車から出てきました。



無言でありながら、多くのことを語り続けている骨、骨、骨。

どうして私たちをここに包囲し集めたのか、帰してくれなどと言ったのですが誰も取り合ってくれませんでした。

一匹の犬が村の方から出てきました。そうすると日本の兵隊が小銃でその犬を撃ち殺してしまいました。その銃声を聞いてお父さんは私を前に立てないで後ろに移しました。

私たちは群衆の中に入って、丘の下にいたんですが、一人の兵隊はカメラを持って私たちを撮っていました。何人かの兵隊は前に進み出てきました。軍曹は通訳を通して自分達がここに来たのは、村人を守るためだと言いましたが、それは村民を騙すためのもので、まったくの嘘でした。虐殺をやったのは、虐殺の真犯人は日本の関東軍なのです。

軍曹の合図で機関銃が発砲を始めました。お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんも一斉に伏せました。私の前には一人の炭鉱労働者がいたのですが先に弾にあたって倒れました。私もその労働者と一緒にすぐに倒れました。お父さんお母さんはどうなっているのか見えませんでした。でも、お父さんの声が聞こえました。「中国人全員を殺すことはできない、私たちを殺してもまだまだ中国人はいっぱいいる。全員を殺すことは絶対にできない。」と言うことでした。また、群衆の中には炭鉱労働者がいたのですが、しきりに走って逃げようと話しかけていました。

おばあさんは股の方に弾があたり、お母さんの妹はもう亡くなっていました。おじいさんは、おばあさんをかばいながら「さわぐな、さわぐな」と言っていました。

機関銃の音と人々の泣き叫ぶ声はだんだん大きくなっていきました。

お父さんは私をかばおうと自分のかぶっていた麦わら帽子を私にかぶせました。その時私が思ったのは、妹も死に、お母さんも殺されたのでもし逃げるのができたなら、大きくなって日本軍に報復してやろうということでした。

長い間して、だんだん静かになってきたので、麦わら帽子を上げて外の様子を見ました。南から北に向かって日本兵は銃剣を持って生きているのがいなか搜索しました。死んだ人もみんな銃剣で刺していました。まだ生きている赤ちゃんまでも発見するとすぐに銃剣で殺しました。

私の胸はドキドキしていました。麦わら帽子をかぶって死ぬのを待っているという

感じでした。私も息を止めて何の声も出ませんでした。日本兵はだんだん近づいてきました。私の所まで来た日本兵は銃剣で私の耳のそばを刺しました。その時は自分が生きているのか、死んでいるのか何も分かりませんでした。

でもまた麦わら帽子を少し上げて外の様子を見ました。前の労働者は死んでいました。私はまだ生きているとその時思ったのです。

また長い時間がたって、周りは静かになりました。すると突然「生きているものは早く逃げよう、日本の兵隊は石油を取りに行ったので戻ってきたら焼かれてしまう。」私はその声はまた騙しているのではないかと心配でした。もう一度「早く逃げよう」という声がありました。

ゆっくり麦わら帽子を上げて周りの状況を見ました。そして、ゆっくり立ってみると肩の方が大変痛かったので見てみると血が出ていました。銃剣で刺されたのだとその時気づきました。

弟はお父さんと呼んでいたのです。お父さん早く逃げようと言っているのですが、すでに亡くなっていたのです。その時、お父さんの眼はまだ死んではいないと見えたのですが、首のほうから血が出ていました。もうお父さんはだめだと思ったのです。お母さんの方も見たのですが、体中血でいっぱいでおばさんも血でいっぱいでした。それから、おじいさんとおばあさんも見ました。でも死んでいました。家族はみんな殺されてしまいました。その時、私は心の中で思いました。日本の兵隊は悪すぎる、短い時間で私の家族を全部殺してしまいました

た。この後、私はどうしたらいいんでしょうか。涙は出てきたのですが、声は出ませんでした。日本軍に聞こえてはいけないと思っていたのでしょ

う。それからもう一度声を聞きました。「生きている人はすぐに逃げるように、日本兵はもうじき戻ってくるよ」と。それで、死体の横を抜けて逃げていきました。

私の家族から5人、親戚の家族も5人合計10人が日本兵の小銃と機関銃に撃たれて亡くなったのです。

5、6人の大人が南向きに走り始めたので私も後を追って走って行きました。でも大人達は途中で北の方に向きを変えて走って行きましたが、私はそのまま振り返ることなく南向きに走りました。後ろから朝鮮人も走ってきました。私はすぐにコーリャン畑に入り込みました。そのコーリャン畑に沿って西へ向かい、隣の村に入りました。その村の丘に立って北の方を見ると、煙が立ちこめていました。家が燃やされていたんでしょう。平頂山虐殺の真犯人は日本の軍国主義者たちです。

虐殺事件から60年近くたっていますが、あの事件のことは私の脳裏から離れません。その時の村民の泣き叫ぶ声、ずっと忘れずにいます。また、妹の小さい手を忘れていません。また、お母さんの叫び声、お父さんの怒りを込めた眼も忘れられません。また、炭鉱労働者が日本軍の小銃の前に立ってくれたことも忘れません。さらに、3,000人の村民大衆が日本軍国主義のもとに殺害されたことを絶対に忘れません。

平頂山の老人たち、子供たち、赤ちゃんにどんな罪があったのでしょうか。日本の

軍国主義者達は3,000人の村民を殺しただけでなく、石油をかけて死体を焼きました。



平頂山殉難同胞遺骨館正面入口。

そして、裏山を爆破して死体を埋めました。自分達の犯した犯罪行為を隠そうとしたようですが、歴史の事実というものは絶対に隠せるものではありません。

毎年旧暦8月の「十五夜」に行なわれたこの虐殺の事実を中国人民はずっと心の中に刻んでいるのです。

日中両国の人民は2000年もの長い友好の歴史を持っています。同じ太陽の光を受けて友好して来たのです。中日両人民が侵略戦争に反対し世界の平和をと共に築くために頑張りましょう。

過ぎ去ったことは過ぎ去ったことです。これからの中日両人民の友好関係は必ずや子々孫々まで伝えることができるとかたく信じています。

もし、全世界の人民大衆が団結すれば必ずや侵略戦争を食い止めることができると思います。以上です。

次に夏維榮氏の証言を紹介します。夏維榮氏は、当時同じ家に同居していた叔父に

助けられた幸存者です。自分の眼の前で父や母が殺された様子などを中心に証言してくれました。

夏維榮（カ・イエイ）当時3歳



証言する夏維榮氏。

今年62歳になります。もとは撫順の坑務局（炭鉱）労務者でした。1985年に定年退職しました。

平頂山の虐殺事件は1932年のことで、その時私は3歳でした。幼い子供ですので現場の様子を見ることはみたのですが、記憶としてあまり残っていません。

私も幸存者の一人として話すのですが、これはもう一人の幸存者である私の叔父さんから聞いたことをお話します。叔父は私がどういう状況の中で生き残り、さらに家族がどういう状況の中で殺されて行ったのかよく話してくれました。

私の叔父は当時27歳で炭鉱の労働者でした。1976年の7月に亡くなりました。

事件が始まったとき、私は家で父、母、叔父ともに日本兵に見つかってしまい、後の虐殺現場になる所に無理やり連れて行かれました。当時家族は4人でした。父、母、叔父に私の4人です。父にはもう一人の姉

がいました。その伯母さんの家族は7人でしたが、近くに住んでいました。

父は私を抱き、母は二つの小包を持って、叔父も一緒に丘の下に連れて行かれました。父は地面に座り、隣に母がいて叔父は近くにいました。村民がいるところからあまり遠くないところに機関銃が並んでいました。最初は全部黒い布で隠していました。機関銃の側には3人ずつ日本兵がいました。村民たちはどうして自分達がこんなことになっているのか分かりませんでした。

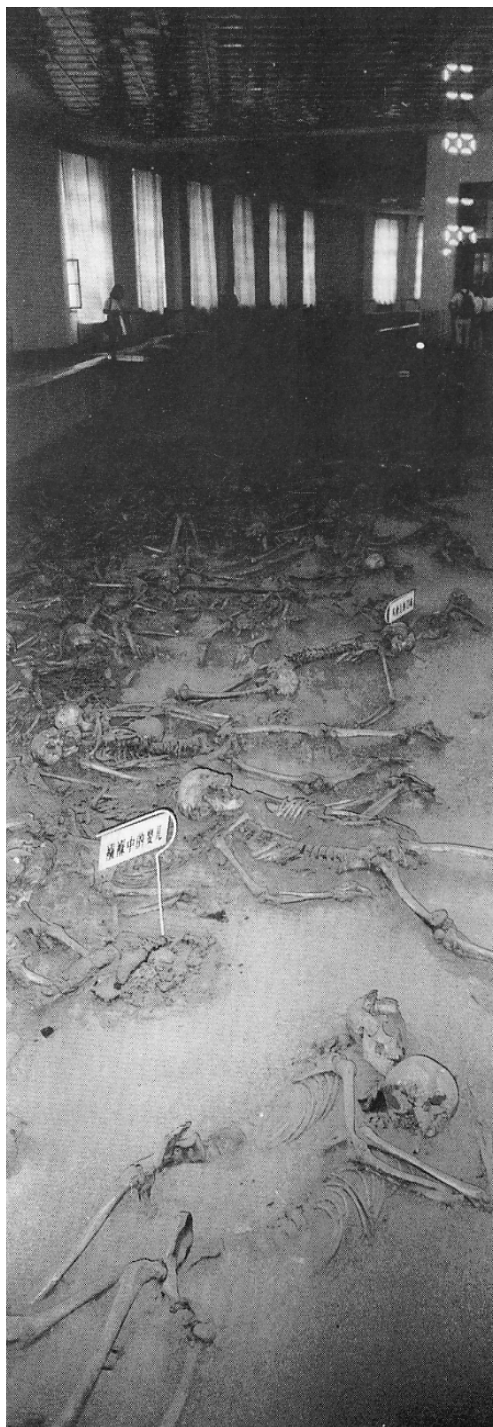
村人たちは各々おしゃべりをしていましたが、その中の一人が村のほうから煙が出ていることを発見しました。日本の兵隊は私たちの家を燃やしたと言いました。それを聞いて村人たちは立って見ていました。そうすると日本軍の軍曹は東に向かって刀を持って動きました。機関銃の覆いも取り払われました。機関銃を見たらみんな心細くなりました。さあ—どうしたらいいのか逃げようともちろん思いましたが、すぐに機関銃の発砲が始まりました。最初の機関銃の射撃により前に立っていた人々が倒れました。一部の村民は走って逃げようしました。石を拾って投げようにも石もなく。みんな草をむしって機関銃めがけて投げていました。何回も走りかけるのですが逃げることはできませんでした。みんな伏せて横になりなさいと年輩の人が言いました。叔父もまだ若いですから何回も逃げることを試みました。しかし、逃げ切れませんでした。そして、また私たちの所にやってきました。叔父が戻ってきたとき、父は私を抱いて座っていましたが、機関銃の弾が頭にあたってもう亡くなっていました。叔父

は父を呼んで「お兄さん、お兄さん」と呼びました。父は生きているときには私を抱いてくれていたのですが、亡くなって私を下に落としてしました。

叔父は自分の兄が死んだので、今度は兄嫁のところ（すなわち母の所）に行きました。（涙で言葉が途切れ途切れになる。以下何度もそういう状態になった）母はまだ生きていましたが、私の方を指して叔父に宜しく頼むというふうでした。叔父は私を抱き上げたんですが、それと同時に弾が片手にあたり傷を負いました。あたっては手は力がなかったので、ずっと片手で私を抱くことになりました。

私は叔父の助けにより立つことができましたので、母の方に寄って「お母さん、お母さん」と叫びました。叔父は心配するなと私を慰めてくれたのですが、何も分からずただ母の方に動いていたのです。叔父は機関銃の弾があたったら大変だからと気遣ってくれました。しかしながら、母は私の安全のため足で私を蹴り、近付けようともしませんでした。母は、私はもう駄目だからこの子を頼むというふうでした。叔父は母に、できたら一緒に逃げよう、私は独り者だし子供の世話はできないと話しました。母は、それを聞いて無然と立ち上がり歩き出しました。何か声を発するようでしたが倒れて死んでしまいました。叔父は私を抱いて逃げようとしたんですが、わたしはやはり母の方に向かっていました。叔父は無理に私を抱いて、数人の生存者と共に南西部に逃げました。

しばらくして、後ろを振り返ってみると煙がいっぱいで、言えは全部焼かれてしまっ



800体余の遺骨が発掘されたままの状態で展示されている。(平頂山殉職難同胞遺骨館内部)

たのだと思いました。現場から逃げることでできた後村はずれの山の上から、村を眺めていました。当時丘の上はコーリャンと大豆の畑でした。叔父はコーリャンの畑に入ってあと、私を地面に置いて自分も横になりました。しかし、私は母のことを思っていつも叫んでいましたので、叔父は安全のため私の口を塞ぎました。叔父が言うには、口を塞いで窒息死の方が日本軍に殺されるよりはましだと思ったそうです。叔父は、また私を抱いて、家族はみんな死んでしまったので、南向きに逃げて行きました。それから、25日間ずっと歩き続けて自分のふるさとに戻りました。

この虐殺事件があってから1932年から1945年まで、この虐殺現場は金網で囲まれて普通の人は入れなかったようです。日本の兵隊がときどき見回っていたようです。

解放後の1951年に撫順市人民政府はこの虐殺事件を記念するため一つの記念碑を建てました。しかし、文化大革命でその碑が破壊されたため1974年に再建しました。今のはその2回目のものです。また、1971年には、虐殺現場に記念館も建ちました。

これまでお話ししたことは、叔父に物心ついた頃から聞かされた当時の様子を話しただけです。莫さんも申しましたが、この虐殺事件はひとにぎりの日本軍国主義者の起こしたことです。多くの日本人民とは関係ないことだと思います。

この虐殺は日本軍国主義者の侵略政策によるものであり、中日両国の人民はいい友達であります。私たちは「前のことを忘れず、後のことの師となす。」とする周恩来首相の教えによって、中日両国人民は必ず

や子々孫々まで友好を続けて行きましよう。

中日両国人民が団結し友好を深めればこのような残酷な事件を二度と起こさせないということができるようになります。これで終わります。

(調査団のメンバーの一人松浦真澄さんの御礼の言葉)

ありがとうございました。

お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんなど愛しい人々を目の前で殺された様子をうかがって、その苦しみや悲しみを思うと心が張り裂けそうです。

また、当時幼かった夏さんがお母さんから離れまいとする姿を思い浮かべますと、また夏さんのお母さんが叔父さんにわが子を頼むと言われたときの気持ちを考えるといたたまれません。

お二人とも私たち日本の軍隊さえやって来なければ家族と一緒に幸せに暮らせたのにと、どんなに口惜しく、また寂しい日々を積み重ねてきたことかを考えると申し上げる言葉が見つかりません。



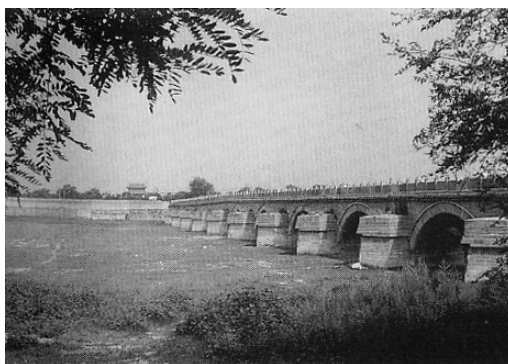
幸存者莫德氏、夏維榮氏を囲んで。(平頂山にて)

2．上海事変と日本軍の上陸

今回の調査の旅のスタートは上海であった。近代的なビルが建ち並び、中国の近代化政策の最先端を行くと同時に、人口が1,100万人と巨大中国の中でも最も大きい街である。そして古くから日本との交易も盛んで1863年には日本領事館も開設された。（上海華東師範大学 忻平先生の講演から）その後多くの日本企業も事務所を構え、租界地では国民学校や病院もあり多くの日本人が海を渡った。日本人にとって馴染みの深いこの街も日中戦争では大きな痛みを残した。

満州事変が進行中の1932年、上海の日本海軍陸戦隊が中国軍と交戦し第一次上海事変が勃発。大激戦の末、日本軍が勝利し停戦協定が結ばれた。

日本国内における二・二六事件（1936年）で、軍部による政権掌握により益々戦争遂行の道へと日本は進む。そして翌年、1937年7月7日、北京郊外で起きた盧溝橋事件で日中全面戦争へと突入、天津、北京を占領。こうした日本軍の進撃に中国は国民党軍と紅軍の内戦をやめて抗日民族統一戦線



現在の盧溝橋。保存のため車両は通行できない。同じ理由からか川の流れもなかった。

を結成し（国共合作）本格的な戦争状態に入った。そして第二次上海事変となった。

1937年8月13日、海軍陸戦隊と中国軍の交戦が始まると、日本軍の参謀本部は上海派遣軍を増派し、川沙（上海の北方、揚子江岸）から敵前上陸を敢行した。防衛庁の「支那事変陸軍作戦」によれば、この作戦は次のように記されている。

第11師団は23日零時、川沙河口沖の錨地（泊地）に進入し、5時ころ川沙鎮北方地区に強行上陸を開始し、江岸の敵を撃退して、午後、川沙鎮付近をおおむね確実に占領し羅店鎮攻撃を準備した。

とある。

次に紹介するのは、この川沙上陸から羅店鎮占領にいたる日本軍の攻撃のなかを生き残った生存者の証言である。

上海市宝山区羅店鎮人民政府（役所）にて（1991年8月13日）

朱曉琳（シュ・ショウリン・宝山区人民政府外事公室幹部）

羅店鎮（鎮は日本でいう町村のこと）は上海の北側にあります。1937年8月13日、第二次上海事変が勃発しました。それから10日後の夕方ごろ羅店鎮の東北部羅經地区川沙から日本軍は上陸しました。上陸してからこの辺りはとても激しい戦争になりました。当時の羅店鎮の家屋は16,000室ありましたが、ほとんど焼き払われました。殺された農民の数は2,400人にのぼります。日本軍が上陸した川沙には石碑もあります。

羅店鎮の東には大きな道がありますが、

その道の両側には死体がたくさんありました。ある村は全部焼き尽くされました。私が住んでいた村には60世帯余りの家族が住んでいましたが、ほとんど焼き出されました。それでは、張家発先生から詳しくお話していただきましょう。



中央が張家發氏。その左隣が朱曉林氏。(宝山区人民政府にて)

張家發(チョウ・カハツ)当時9歳

羅店鎮は700年の歴史を持っています。1937年8月23日川沙というところからたくさんの日本兵が上陸してきました。その後7日間の激しい戦闘が繰り広げられました。中日両国の投入した兵力は2～3万人にもなりました。当時の戦争はとても残酷な状況でした。逃げる事ができない中国人はほとんど日本軍に殺されました。

私の家はこの道の向こう側ですが、この辺りは日本軍が占領してからほとんど焼き払われました。当時私は9歳でした。私の家は日本軍が上陸してからいち早く西の方へ逃げたんですが、逃げる途中で3人が死んでしまいました。一人は私の従妹が食べ物がなく病気になるって死んだんです。あとの二人もまだ幼い子供でしたが死んでしまいました。当時12歳だった姉も日本軍に強

姦されましたが、今でも生きています。

さて、7日間の激しい戦闘が終わってすぐに帰ってきましたが、私の村の中には40～50体の死体がありました。中には妊娠している30歳位の女性がいましたが、腹を切られ子供が引きずり出されて死んでいるのもありました。これは私が直に見たことであります。

当時国民党軍は、ここで日本軍と大変激しい戦闘をしましたが、国民党軍の将軍が2、3年前ここにきて話をしました。日本軍が昼間は羅店鎮を占領し、夜また取り返し、翌日また日本軍に占領されるといった激戦だったと語っていました。日本軍は羅店鎮を占領してからこの建物の近くに司令部を置きました。その頃の日本軍の最高の肩書は少将でした。本部はカテイ県にありました。また、小学校が一つありましたが、そこは日本軍の監獄に使われましたが、夜となく昼となく悲惨な声が聞こえてきました。

中国国交が回復してからたくさんの日本人が来たことがあります。だいたいの当時の日本軍の兵士でした。当時日本軍はここにいましたが、食べ物がなく戦馬まで食べていました。生活も非常に苦しかったのですが、周辺の農民達は日本軍に自分達の食べ物を提供したんです。当時のことを振り返りながらいろいろ話をしたんです。

私は小学生でしたが、隣には司令部がありこの建物があるところは空き地で、日本軍はここで人を殺しました。それで、私より年齢の上の人はみんな抗日戦争のことを話すことをとても不愉快に思います。

この近くに一つの記念碑があります。国民党軍と日本軍の空中戦があり、国民党軍の飛行機が撃ち落とされパイロットが負傷しました。当時のここの病院の院長と看護婦3人が治療しようとしたが、院長と看護婦を日本軍が捕まえ、院長は殺されました。その死体を日本軍は六つに切断しました。死んでからも侮辱されたんです。そして、3人の看護婦も殺されました。この記念碑はその院長と3人の看護婦を記念するために建てたものです。



医師と看護婦が惨殺されたことを示す。「抗戦殉難烈士記念碑」

朱曉琳

我々はこういう歴史を忘れずに、日本の各分野の人々と交流して行こうと思います。これは過ぎたことですが、未来へ向けて日本人民と交流を深めて行きたいと思います。現在の宝山鉄鋼所も日本の援助でつくったものですし、各分野で中日友好のために進めて行きたいと思います。本日はたくさんの方々がきて頂きありがとうございました。これからも友情を深めてまいりましょう。

「この第二次上海事変は『事変』というような規模ではとうていなく、100万人近い日中両軍の兵が死力を尽くしての大決戦であった。」(本多勝一著「南京への道」)という指摘もある。本多氏は同書の中で、当時召集されて天谷支隊(第11師団の一部)に加わった一下士官の戦後の手記を引用しているので長文ながらここでも引用し当時の様子を知る手だてとしたい。

こうしてビリから岸壁にはいあがった私の目を射た風景は、まさに地獄であった。修羅の巷もこんなにひどくないであろうと思われるほど残酷なものであった。岸壁上一面が見わたすかぎり死体の山で、土も見えないほど折り重なっていた。まるで市場に積まれたマグロのように、数千の兵隊の屍が雑然と転がっている。それと同時にヘドの出そうないやな死臭が私の鼻をついた。

これは10日前に敵前上陸した名古屋第3師団の将兵の変わり果てた姿であった。彼らはこの地に中国軍の大部隊が待ちかまえていると知ってか知らずか、上陸するやいなやつぎつぎになぎ倒されていったにちがいない。そして兵隊たちは、何が何やらわ

からないまま死んでいったのだ。(中略)

その上それらの死体はみな、内蔵腐乱のため発酵して丸く膨れ上がり、その圧力で身体の軟らかい部分が外にふきだしていた。眼球が5、6センチも顔から突き出しているのである。なかにはウジ虫のかたまりとなりはてて、幾万もの虫がウヨウヨとかたまってうごめいている上を、無数のハエが黒々とたかっているものもあった。私はこのありさまを目にした瞬間、脳貧血をおこして倒れてしまいそうになった。第3師団と同じく8月23日、川沙口に上陸した第11師団長山室宗武中將が戦後語っているところによれば、この上陸の犠牲者は1万人にものぼっていたということである。

日本兵の戦死者が1万人ということは、中国兵の戦死者もかなりの数であったろう。激戦の様子を伝えるのに十分な資料である。

生存者の証言を聞いて後、私たちは上陸地点や記念碑を見に行った。川沙にある記念碑の表には、「小川沙侵華日軍登陸處」とあり裏には、日本語になおすと次のように

刻まれていた。

1937年中国人民抗日戦争が勃発した。8月13日、日本軍は上海を侵略しました。そして、8月23日(旧暦7月18日)夜半ごろ川沙河口に上陸しました。

無垢の群衆2,442人を殺しました。ここ羅經地区において10,908の建物を焼き払いしました。当地の人民はこの日を「総忌日」と呼んでいる。ここでこのことを特に石碑に刻み永久に忘れない。

1985年9月3日

上海市宝山区人民政府

現地に赴くと大規模な護岸工事が完了し、コンクリートの擁壁が長々と続いていた。そして記念碑も立替されたようである。本多氏が調査に出かけた頃とは風景も変わったが碑文の内容も変わっていた。「南京への道」で彼は碑文にはそのようなことが刻まれていたと書いている。

「永志不忘」と彫られた石碑の裏面には、「血海深仇、永志不忘」の見出しの下に、



川沙にある日本軍上陸記念碑。向う側は揚子江。

1937年8月の日本侵略軍上陸にいたる概略、上陸してから三光政策による殺人、放火、強姦略奪が行われたこと。「血は河と流れて海の色を変え」、聞愛生の一家9人が皆殺しにされたのをはじめ羅經地区で2,244人が殺され、10,908室が焼かれたこと。毛主席と中国共産党の指導で中国人民は日本軍国主義を打ち破ったが、高い国際主義精神でその軍国主義者と人民を区別し、伝統的友好関係に立つこと。...などが、1973年8月13日付で説明されている。

同書で挿入されている写真などからも、長文の碑文であったことは読み取れたが内容的にもかなりの違いがあり、やはり歴史の流れのなかで理解されなくてはならないことなのかもしれない。

3．南京虐殺事件

南京大虐殺事件とは、日本軍が30万人（南京大虐殺記念資料館の入口には犠牲者30万と彫られていた。）もの中国人民を数週間の間にも虐殺した事件のことである。

1927年（昭和2）中国国民党政権は首都を北京から南京へ遷した。そして1930年代半ばまでには100万以上の人口をかかえる都市となっていた。その多くは日本軍の戦禍から逃げ延びた人々であった。日本軍が1937年10月に南京に接近したとき蒋介石総統が決定したのは、あわてふためく多くの中国人のためにこの首都を防衛することではなく、軍を統合するために中国のさらに奥地へと撤退することであった。南京の人口の約半数も逃げたといわれる。

12月12日の夜、中国軍の抵抗がすべて終

わり、その翌日、最初の日本軍の一団が南京に思いのまま入城した。以後数週間に及ぶ大虐殺が展開されることになった。



中華門に進軍する日本軍。

私たち調査団が南京大虐殺記念資料館を訪れていた8月15日に初版発行された『東京裁判』（アーノルド・ブラックマン著・日暮吉延訳）のなかに法廷で日本軍の南京入城の頃の惨状を幸存者の許傳音（キョ・デンオン）氏が証言しているので長文であるがここに引用する。

人を見あたり次第に射撃したのであります。例えば逃走中の者、街を歩いている者、もしくはそこらに立ち止まっている者、もしくは戸の隙間から覗いている者もことごとく撃ったのであります。日本軍の南京入城の3日後、路上には死体が散乱していた。「私は死体が至るところに横たわっているのを見ましたが、その中にあるものはむごたらしく斬り刻んであったのであります。...ある死体は身体を曲げており、又、ある者は両足を広げておりました。」と彼は続けた。彼はある大通りで死体の数を数え始めたが、その数は、500まで数えると、あまりの多さに「もうこれ以上数えても仕方がないと思

ってやめた程」であった。日本人はまた安全地帯に進入して、手に一目瞭然の銃ダコがある男性すべて拘引した。捕らわれた人々は、10人から15人ひとたばに縛られて、連行された。たった1日で、1,500人も男性や少年がこのように連れ去られたのである。夜になると、避難民たちは安全地帯で絶え間ない機関銃の音を耳にした。

しかし、いちばん苦しんだのは女性たちであった。許証人はたどたどしい英語でこう語った。「日本兵は女が非常に好きで、信ずべからざる程女に対する嗜好を示しておりました。」少女や30代から40代の女性は捕らわれて集団強姦された。許は言う。彼がある家を訪ねると、その家のなかで2人の少女を含む女性3人が強姦されており、「この若い娘さんは卓の上で強姦され、そうしてその卓の上にはまだ血が流れているのを私は見ました。」

許は、中国の赤十字に相当する紅卍字会のメンバーであった。数日間におよぶ無差別殺害ののち、腐乱死体のために伝染病がはやることを恐れる日本人は埋葬班を組織した。許は、紅卍字会が以後数週間にわたって43,000の死体を埋めたが、実際は数はたぶんもっと多いだろうし、日本人が紅卍字会に記録をつけることを許さなかったから、実際の数を立証することはできなかったと述べた。ほとんどの死体が手と手をつながれており、時にはロープやワイヤーで縛りつけられていた。「その死体がもし縛られている時には、これを解き放すということが我々の神聖なる仕事なのであります、そうしてこれらの死骸を一つひとつ埋葬するのが我々の仕事です。しかしながら、こ

れらの死体が電線によって縛られているときには、これを解き放すことは殆ど不可能なのであります。多くの場合に於てそれらの死体は既に腐乱し去っておったのであります。」

「東京裁判」では、当時南京にいた外国人の証言も収録されている。南京大学の歴史学教授として教鞭をとっていたマイナ・サール・ベイツもその一人である。

ベイツの証言によると、12月16日、30人の女子大生が大学の構内の建物の中で強姦された。その翌日、18人の女性が構内のまた別の6箇所強姦された。大学に残っていた女性たちはパニック状態に陥った。これまで法廷は不気味なくらい静まり返っていたのだが、ベイツが自分の勤務先である南京大学は日本総領事館の近くにあったと無造作に述べると、傍聴人ほかの人々はあえぎ声が上がった。その意味するところは明白である。つまり、南京の日本軍高級司令官のみならず、日本総領事館員たちも、この悲惨な状況に気づいていたわけである。この6週間というものは恐怖におおわれていたのである。

最近その存在が確認され話題になった「幻のフィルム」を撮影したアメリカ聖公会の宣教師ジョン・マギー氏も証言している。

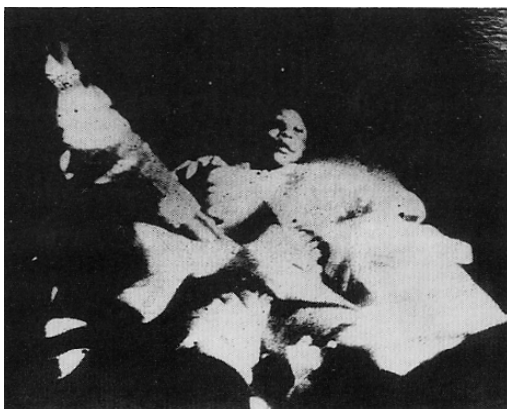
日本の領事がマギーに、南京北部への小旅行に同行して、どれが外国人所有財産であるかを指摘してほしいと依頼した。それというのも、マギーが外国人所有財産を日本軍から保護するために日本語の掲示を出

したいと望んだからである。マギーはこう言った。「私は近道をしようと思って、横道に入りましたが、死体が多くて、死体の上を運転して行かなければ通れないのでありまして、致頭、私たちはその横道を引き返した程でありました。」彼がある場所で海岸を見おろすと、300から500の死体が3段に積み重ねられている有様であった。マギーはこう続けている。「その死体の着ております衣類は非常に焼けておりました。そうして身体の到るところに傷があったのでありまして、その状況から見ますと、彼らは殺された後、焼かれたということが分かるのであります。」この小旅行中、彼らは鉄道停車駅に通じる大通りへと向かった。この大通りには、死体が散乱してしていた。証言によると、12月22日、彼は次のような写真をとった。それは路上に中国人60人の一群がいて、女性たちが道端にひざまずき、日本兵にその男たちを釈放してくれるように嘆願している光景である。

検察側は、目撃者ばかりでなく、南京の街に住んでいた小数の外国人の日記をも、この静まり返った法廷に提出した。それらの日記は自発的に書かれたものであり、その内容は恐るべきものであった。中国生まれのアメリカ人ジョージ・フィッチはこう記した。「数百の無垢の人民が、或は射殺されるために、或は銃剣で刺殺されるために我々の目前に連出される。吾々は彼らを殺す銃声を聞かねばならぬ。走るものは誰でも射殺するか、銃剣で刺殺するかがこの規則であるらしい。」ジェイムス・マッカラムの12月29日の日記には、「抵抗した妊娠6カ月の婦人が顔面や身体に16箇所の『ナイ

フ』傷と腹部に1箇所の突傷を受けて私どもの所に参りました。彼女は赤子を亡くしましたが、彼女の生命は助かるでしょう。」

この助かった女性は、マギー牧師の「幻のフィルム」の登場する季秀英さんと思われる。長文の引用をさせていただいたが、当時の様子が極東国際軍事裁判（東京裁判）の法廷で明らかにされている点を強調したためであった。



日本軍に暴行され病院に運び込まれた当時の季秀英さん。マギー牧師が撮影したフィルムの映像と一致した。

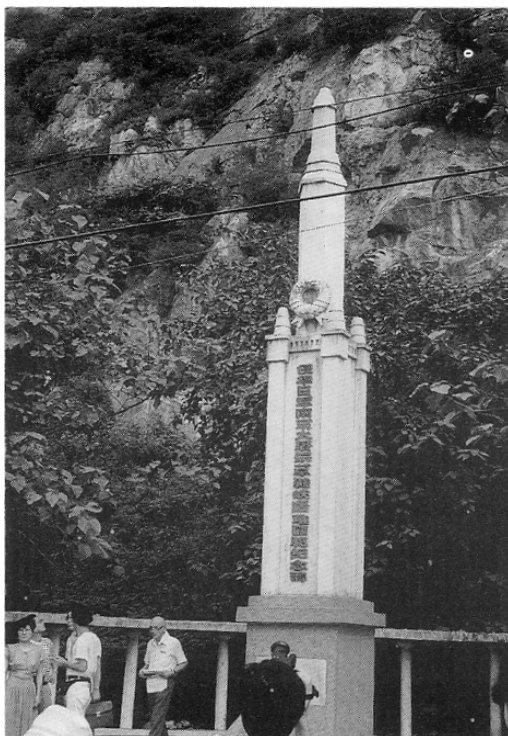


日本兵の暴行に反抗して、身体中に傷を負った季秀英さん。米宣教師マギー牧師の撮影した16フィルムに登上した女性。

次は、今回の調査のなかで特別に非公式での生存者の取材ができたので紹介したい。現存する人々にとって南京大虐殺はまだ終わっていない。そうしたことを彼らは訴えていた。非公式の会合での証言であり実名を避け以下内容を紹介しよう。

Aさん（79歳）

日本軍によって妻と子供を殺された。難民区から出た直後家族全員が捕まった。池に入れられた。衣服を乾かすからと脱がされ、焚火にあたれと言うので火に近づいたら、そのまま体の毛を全部焼くような虐待を受けた。その後、難民区に入ったが、日本軍が難民区の人々に難民登録をしろと言ったので外に出たら、全員草鞋峡に連れて行かれたが、そこで機関銃による虐殺



草鞋峡にある記念碑。

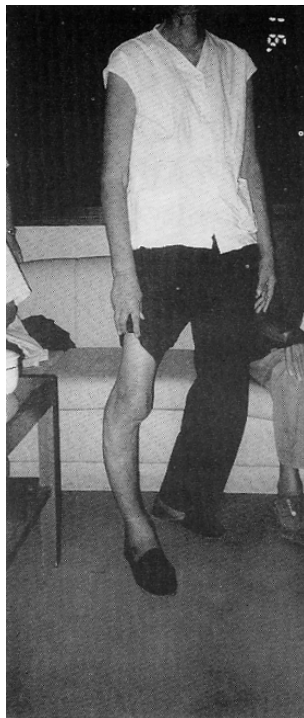
が始まった。日本軍は難民区に国民党軍が隠れていると思ったようだ。

日本の石原発言に対して、なぜそんなことを言うのか分らない。私は私の目で実際に見たのに、石原にはへをかましてやりたい。私は日本に対してその当時の賠償をして欲しいと思っている。日本人の友人に対し、私たちへの賠償について努力して欲しい。日本人にもいい人が大多数いると思うが、石原発言は信じられない。

それから私は、11歳か12歳くらいの少女が強姦されて殺された場面も目撃した。

Bさん（74歳）

日本軍が入ってきたとき、正に無条件無差別殺りくだった。私は子供が生まれてまだ2カ月だった。ちょうどおむつを洗って



ズボンを上げ、撃たれた足を見せてくれたHさん。

いたが銃弾が足にあたりその後意識がなくなり治療を受けたが、3年間はベットから起きれなかった。日本軍は狙って撃ったように思う。その後も貧しい生活だった。精神的にも苦しかった。日本に対しては罪を認めて、言葉だけでなく賠償もしていただきたい。(今でもびっこをひき歩くことも不自由なおばあさんであった。)

Cさん(71歳)

日本軍が入城して三日目の午後2時頃、住んでいたところに日本軍がやってきて7、8人が連れて行かれた。当時私は18歳だったが上は40歳くらいだった。難民区に逃げる時間もなく、そのまま家に残っていたのだ。その後ソーウォンフというところに連れて行かれた。そこは馬さんという人の家だった。その家の庭に閉じ込められた。そして斧で首を切りつけられた。その後全員を西側の壁に向いて膝まづけと命令し並ばされた。日本軍の一人が銃剣で南側のほうから順番に突き始めた。もう一人は庭の入口で斧を持って逃げないように見張って射た。連れて行かれた一人が私は馬を持っ



日本軍は捕虜となった市民を柱にしばりつけ、銃剣の訓練と称して刺殺した。

ていると言いその馬を取りに行った。一人目を刺して二人目を突こうとした時に端にいた二人が逃げようとしたが銃剣で胸を刺された。その時銃剣のボタンを押して銃剣を抜いたら、日本兵が倒れたのでその隙に裏口から逃げた。日本兵は逃げる私に2発撃ったがうまく曲がったのであたらなかった。その後家に逃げ帰ったが、辺りは全部日本兵に焼き払われていた。

その後、紅卍字会の死体処理班にも参加させられた。難民区にいて食糧もなく、おかゆをもらいに行ったが、その時仕事があるがやるかと言われた。その仕事は死体を処理することだった。紅卍字会のトラックに運転手一人、処理班数名だった。ムシロで死体を丸めて載せた。その仕事をすると給料はもらえないが食糧がもらえた。死体は準備された大きな穴に入れ埋められた。わたしはこの仕事を一カ月ほどしたが二カ月した人もいた。



日本軍兵士に強姦された後、腹部を切られ死亡した女性。内臓が露出している。

一番悲惨だったのは女性で、強姦されて後に殺されていた。ベットの上に両足を広げて縛られ、局部には瓶が詰め込まれていた。これは死体を集めている仕事の中で見たことであり本当の話である。(哭いていて

話にならず、しばらくしてポツリと)日本は賠償する責任があると思う。

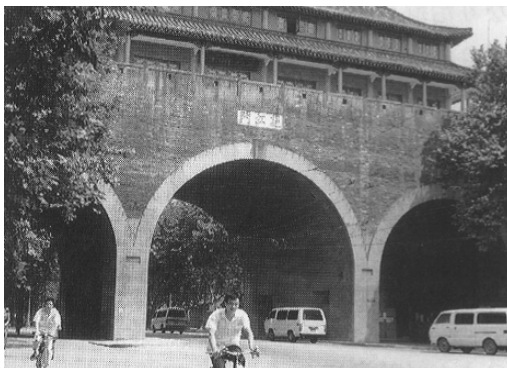
死体を処理した場所は、南京城の南側中華門の辺りだった。死体を集めたのは家の中が多かったが、少なくとも一軒あたり7、8人だった。時には道路脇に積み上げられた20名位の死体を処理させられたこともある。

Dさん(78歳)

私は当時中華門の近く(東側)に住んでいて、家族は5人いた。1937年12月14日、日本軍が入ってきたとき、弟と二人国民党の所在地であったところに連れて行かれた。そこには全部で12人いた。日本軍はその12人を虐殺の現場に連れて行こうとしたが、従わないものは銃で殺された。私を含めトラックで連れて行かれた者はほとんど20代の青年だった。現場に着くと、そこには約5~6000人がいた。8人が一列にならべさせられていた日本軍の将校は馬に乗り、サーベルをぶらさげていた。日本兵は銃を構え8人1列の人々を挹江門方面へ移動させ下関(シャーカン)の河口の方へ連れて行かれた。しばらくすると川(揚子江)の中から機関銃の一斉射撃があり8人が殺された。

次々にそうしたことが繰り返されとても悲惨な状況であった。ついに自分達の番になったので、弟と一緒に機関銃が発射される寸前に川に飛び込んだが、運悪く弟は弾にあたって既に死んでしまっていた。水位は胸のあたりだったが、水の中で考えたのは父も死に弟も死んだので自分もこの川に沈んで死のうということだった。しかし、綿入れのようなものを着けていたのでなか

なか沈まず浮いているような状況だった。



現在の挹江門。石積みはほとんど当時のままである。

耳も聞こえなくなっていたので死んだふりをしていた。日本兵はいったん銃殺した死体を銃剣で刺し、死んでいるかどうかを確認して歩いたが私は運が良く難を逃れた。午前3時頃までそのままの状態でしたが、辺りをうかがって、その場から脱出して岸から道路の方へ逃げた。そこにはガソリンで焼かれた多くの死体があった。泥だらけの服装では歩きにくかったので、ある死体の山の中から衣服を取って着替えた。朝まで歩いていたらまた日本軍に捕まってしまった。この時はすぐに殺すことはなく、苦力(クーリー)として働かされた。重いものを担がされたりしたが、食事を与えられなかったため動けない者もいた。しかし、日本軍は容赦なく働かない者を銃殺していた。クーリーとして働かされたところは、中華門から300メートル位離れたところであった。日本軍の虐待でひどいものは、日本兵が風呂に入るとき湯加減が悪いというのはその場で殺され、女性は捕らえられると日本兵の情欲のはけ口にさせられた。日本兵が帰った後、元の居住区に帰ってみると、

12人連れて行かれたうち生き残ったのは私一人だった。つまり、中山埠頭での虐殺は5,000人と言われているが、生き残ったのは私一人である。

Eさん(55歳)

私は当時生まれてまだ6カ月だったという。祖母から聞いた話では、当時国民党の学校があったところで祖父は日本兵の負傷者の世話をさせられていたという。お茶を運んだり水汲みをしたりの雑用がその任務だったようだが、負傷兵達はいろんな悪さをして楽しんでいただ。ある時、回りに火を付けて遊んでいたので、祖父は水を掛けて消そうとしたところを負傷兵の拳銃で殺されたという。祖母は祖父が心配だったのでさがしにきたが、その祖母を負傷兵は刺したという。幸い致命傷ではなく生き

延びて私に祖父のことを話してくれたのだが、自分が受けた虐待については話せるものではないと言っていた。

日中両国がこれからも仲良くやって行くためには、前に起こったことを忘れず、自分達が受けた心の傷も含めて賠償すべきである。

Fさん(57歳)

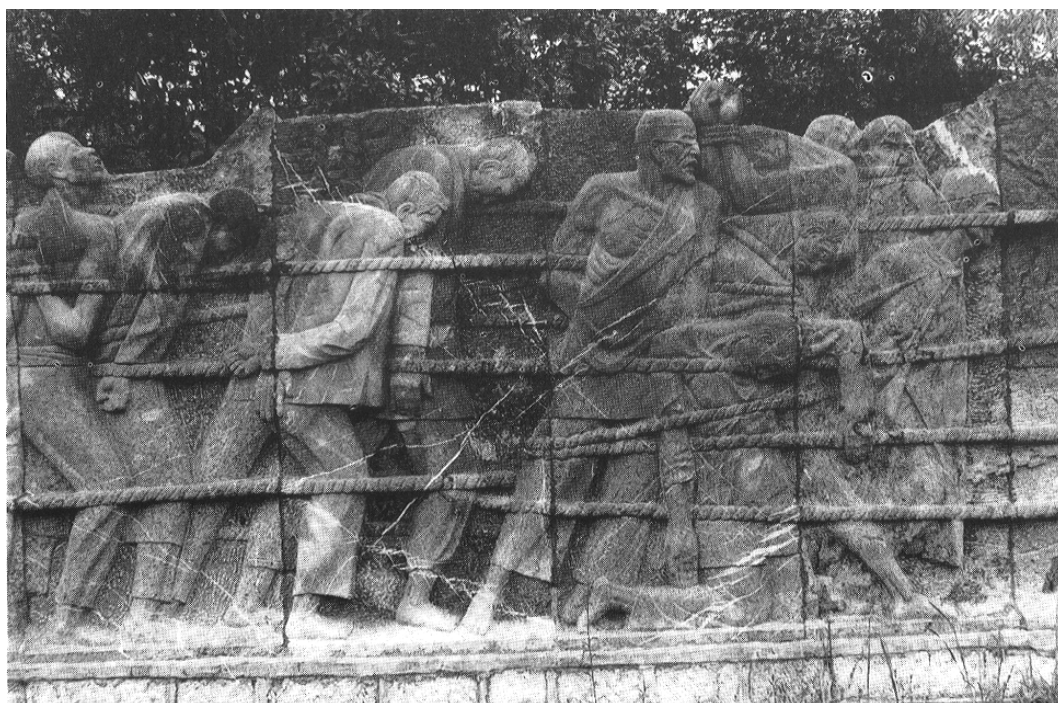
私の父は下関(シャーカーン)において集団虐殺された一人である。自分の家も焼かれ、家族も失い、たった一人生き残り親戚の祖父、祖母のもとで育てられた。戦争当時は3歳だった。祖父、祖母は日本軍の残虐行為についてよく私に話してくれた。私のような戦争孤児はたくさんいる。私たちが受けた心の傷、精神的打撃と苦痛に対して日本は賠償すべきである。



殺人を行った日本軍兵士が刀に付いた血のりを拭いているところ。

日本がたくらんだ盧溝橋事件は、日中全面戦争のプロローグであったが、南京大虐殺事件もその後に続く侵略戦争の第一幕にすぎなかった。日本は、1938年から1945年にかけて、華中・華南の四つの主要な侵攻に着手し、海軍が中国沿岸を封鎖し、中国奥地を爆撃した。日本は徐々に中国の一部地域を占領してゆき、占領地は増え続けた。蒋介石配下の軍隊は山地の奥深くへと入って行き、最終的には重慶を暫定的な首都とした。北平、上海、漢口、広東といった中国の大都市が一つずつ日本の手に落ちた。強姦、掠奪、殺人が当然のように行われた。前述の「東京裁判」のなかにこれまで述べてきた中国における日本軍の蛮行につい

て、連合軍戦争犯罪委員会が分析し、まとめた日本軍の太平洋戦争における戦争犯罪の性質が書かれている。それによると「日本の残虐行為は、たんに個別的で偶発的な事件の集まりというだけではなく『慎重に計画され、極東と太平洋のいたるところで組織的に行われたものであった』。」と述べ、戦場の司令官のみならず東京も、帝国軍隊によって行われた残虐行為に対し責任があった。としている。このことを私たちは忘れてはならない。そして、ブラックマンのいうように「人間の人間に対する非人道的行為に苦しみ、かろうじて生き残った人々の言葉を決して忘れ」てもならないのである。



ロープにつながれ残殺現場に連行される人々。